

国境を越えて学んだこと

新しい教育環境の夢へ

論文梗概

小学校時代の多くをドイツ人の家庭で育ってきた私は、ドイツ人の友人たちとの文化的相違に苦しんだり喧嘩をしたりしながら、自分を見つめるようになっていった。「違い」以上に、彼らと心触れ合える日々を、私は楽しんでいった。そんな私は、皆が同じような考え方をしなければならない。日本の小学校に漠然とした違和感を覚えるようになった。同じ学校に通っていたドイツの友人が、いじめにあい、ドイツ人学校に転校して行ってしまったのを見て、私はますます、そのような思いを強めていった。多様な人たちが、多様が当然な環境で学ぶことができればいいのに、と私は、いつしか夢見るようになっていた。

大学に入って、ふと、その夢を実現させてみようと思った。そうして仲間を集めて、小学生のための国際文化交流サークル、「早稲田ドーナツ（略称ワセド）」を設立した。ワセドには、いつしか数多くの外国人留学生が参加するようになった。その多くは日本語学校のアジア人で、彼らはアルバイトと学校の往復で、日本人の友人が一人もできず、その上、自分が日本では、誰からも必要とされていないという、漠然としたフラストレーションを溜めていた。

私たちは共に、小学生のための国際文化交流会を定期的に企画し、小学校の総合学習での授業を企画した。共に企画をする中で、文化や言葉の違いから、齟齬や口論などは絶えなかったが、成功の喜び、失敗の悲しみを共有し、いつしか、国も言葉も文化も越えて、心が一つに溶け合うような感覚を知った。「違う」からこそ、助け合える。しかも、その「違い」も、超越することができる。私は、そのような最高の感覚を知った。

この経験が、私に新しい教育環境をつくることを人生の目標とさせた。現在、大学院で教育学を研究し、いつしか、異文化異世代コミュニティスクールとでもいうべき、多様な人たちが生活を共にしながら成長できる、教育環境の実現を夢見ている。

目次

はじめに.....	14
一、小学生対象国際文化交流サークルの設立.....	15
二、「共有する」ということー国際理解から人間理解へー.....	18
三、異文化異世代コミュニティスクールのアイデア.....	22
おわりに.....	23

早稲田大学大学院教育学研究科修士課程二年

苫野一徳

はじめに

今日の学校は、大抵、同じ年代の、同じような考え方をした、同じバックグラウンドを持った子どもたちの教育機関として存在している。私は子どもの頃から、それに漠然とした違和感を持っていた。

小学生の頃、両親が仕事で遅くなる週末、私は近くのドイツ人の家庭に預けられることになっていた。なぜそうなったか今でもよく分からないが、私はおよそ四年間、そのドイツ人の家庭で育てられた。同年代の少年が二人いて、彼らと文化的な齟齬を互いに経験しながら、成長した。ドイツの文化を誇る彼らに対して、私も、必死で日本文化を学び自慢しようと努めた。一時期は、彼らがドイツ語をドイツ語でドイツ語と発音するだけで、私は彼らとの違いを思っ、疎ましく思うこともあった。食卓ではいつも、私には分からないドイツ語の会話に笑い声をあげる家族の中で、一人孤立した淋しさを感じていた。それでも、ドイツに帰国して十数年が経った彼らと今でも心打ち溶け合える友達同士でいられるのは、あの頃生活を共にし、互いの喜びや悲しみを、分かち合ってきたからだと思う。

モリツとダービッドというこの兄弟と友達になったのは、まだ小学校にも入る前だった。初めの頃は、互いの違いすら

意識することはなかった。そもそも子どもは、自他の区別があいまいだが、白い肌、茶色の髪を見ても、日本語でしゃべり会話ができてなくても、私は彼らが外国人であるということすら認識していなかったのではないか。私たちは毎日、当たり前のように、ごっこ遊びをしたり、レゴブロックを作ったりして遊んでいた。

互いの違いをほとんど嫌悪するほどに意識するようになったのは、小学校三年生くらいからだったと思う。お互いに自分の属する文化を誇り、相手の文化をけなし合った。ドイツの小学校は夏休みが二ヶ月もあると言う。なんて怠け者の国なんだと私が罵れば、勉強ばかりしている日本の子どもたちこそ無知なのだと彼らが応酬する。生徒に暴力を振るう日本の教師（当時はまだ体罰がそれほど問題視されていなかったと思う）を彼らが批判すれば、私は、それこそ愛の鞭、武士の国らしい教育ではないかと、奇妙な日本観をもつて応じていた。

そのような時、私たちは、お互いを個人としてではなく、「ドイツ人」「日本人」として見ていた。「個人」という概念は、まだ知らなかった。しかし、そのような経験が、明らかに私たちの「アイデンティティ」といわれるものを育んでいた。「異質」を感じて初めて、私は「自分」を見つけた。

喧嘩をした後も、しかし私たちは、一緒にレゴの城を作っ

たり、音楽を聴いたり、公園で遊んだりしているうちに、すぐにいつもの仲のいい友達に戻った。城作りに共に苦心惨憺し、同じ音楽に感動し、公園で新しい遊びを考えたりしているその時、私たちは、互いを「ドイツ人」「日本人」として見ることはなかった。私たちは、同じ「思い」を共有することのできる、同じ人間なのだなあと感じた。

いや、その頃そんなことを考えていたわけではないと思う。ただ実感があつた。後になって、それが、感情を共有することと可能になった、本当の意味での「国際理解」だったのだと思つた。いや、私たちは「国際」と言うには、あまりにも互いを同一視し過ぎていた。日本人もドイツ人も関係ない。お互い「個人」として、「相互理解」をしていたに過ぎない。モリツは私と同じ小学校に通っていた。しかし入学して二年も経たないうちに、彼は遠いドイツ人学校に転校してしまつた。クラスメイトたちは、彼を、ガイジン、キンパツと言つて、毎日いじめていた。

そんなモリツを励まし、時にクラスメイトたちから守つたりしているうちに、私もまた、この日本の小学校に漠然とした違和感を覚えるようになっていた。モリツとダービッドとの生活は、互いの違いに苦しみながらも、違つて当然、それでもなお何かを感じ合えることが楽しかった。しかし、日本の小学生たちとの生活は、子ども心に、どこか自分を彼らと

合わせなければいけないような感覚があつた。それは、どこか息苦しく、私にとつて不自然だった。手品師の手の中にぐいと押し込められる、赤いスポンジボールのような感覚があつた。

私は反抗した。ちょうどその頃、ファミコンが流行つた。私はあえて、決してファミコンを手にしないと誓つた。小学校二年生の頃だった。それまで仲の良かった友達は、次々と私から離れていった。それでもなお、私は決して、彼らと話を合わせるための努力はしなかった。その後の学校生活は、表面上は友達も大勢いたとは思ふが、私はいつも、どこか孤独だった。今思えば、面映い、幼い反抗心だったが、あの頃はあの頃で、精一杯悩んでいたと思う。

もっと多様な人たちと共に生活を送れる、そんな教育環境を、私はいつの頃からか、夢見るようになっていた。

一、小学生対象国際文化交流サークルの設立

それから十年、大学に入学した私は、その夢を叶えてみようじゃないかと、ある時、ふと思つた。そうして仲間を集めた。できたのが、小学生のための国際文化交流サークルだった。

大学生と外国人留学生が、定期的に、小学生のための国際文化交流会を開催するというサークルだった。最初の呼びかけに、大学生は十五人、留学生も、韓国、フランス、中国、

ベルギーから、十人が集まってくれた。

国際化が進むにしたがって、インターナショナルなコミュニケーションスキルやノウハウ、知識が必要になる、そんなものを、このサークルで子どもたちに早い時期に身につけてもらおう……などという意識は、私にはほとんどなかった。そうではなくて、ただただ、子どもたちが、異文化との出会いに驚き、苦しみ、そうすることで自分を見つめ、いつしか異質な存在と何かを共有し、愛を感じられるようになれば、そうしながら成長していくことができれば、ということだけを願っていた。そして、それと同じくらい、私たち大学生や留学生自身も、この出会いを通して、刺激を受けながら成長したかった。

当時、私の知る限りでは、大学生と留学生がタッグを組んで、小学生のために国際交流の機会を作る、という団体は、他になかった。私は、このスタイルに、何か新しい可能性を感じていた。小学生にとつたら、大学生もまた、「異文化」である。しかし、お兄さんお姉さんとして、十分に、しかもすぐに、心打ち溶け合う関係を作ることではできる。留学生と子どもだけでは難しいコミュニケーションも、大学生がいれば、より有意義に達成できるだろう。大学生と留学生と小学生が、絶妙なトライアングルを形成することができると思った。

当時、「総合的な学習の時間」が、各学校で実験的に始ま

っていた。私たちは、いつか、その時間に参加できるようになつたらいいなあと、設立当初、話し合った。

このサークルは、「早稲田ドーナッツ」と命名された。略称「ワセド」である。当初、私一人だけが、この甘つた思い、そして何をやっているのか分からない名前に反対した。「円」のイメージ、と言ったのは私だったが、ドーナッツはないだろう、と。しかし、どことなく親しみとインパクトのある名前が、皆の気に入った。設立から五年、今一番この名前に愛着を持っているのは、私だろうと思う。

設立時、これは新しい教育環境として実に可能性がある、と、身の程知らずな自信を抱いていた私は、若い情熱に後押しされて、新宿区教育委員会に、助成依頼をしに飛び込んだ。そこで生涯学習振興課を紹介され、社会教育主事の方に思いを説明したところ、国際交流財団と生涯学習財団を紹介していただいた。この二つの財団の助成を得て、私たちは活動資金と活動場所を得た。

初めての国際文化交流企画は、クリスマスパーティーだった。二十人の子どもたちが集まった。ゲームやプレゼント交換を楽しみ、留学生が、それぞれの国では、どのようにクリスマス祝うのか、また祝わないのか、話をした。そして、各国のクリスマスを経験できる企画を設けた。

まだ企画のノウハウも何もない時期だったから、異文化と

の触れ合いから自分を見つめ、そして、共に何かを感じ合えるような場、という私たちの目的が、どれだけ達成されたかは分からない。しかし、とにかく楽しかった。このような国際文化交流会を、私たちは各季節ごと、翌年には隔月で開催するようになったが、この初めてのクリスマスパーティーに参加してくれた子どもたちのほとんどが、その後も毎回参加してくれるようになったのは、私の一番の喜びだった。

このパーティーには、私たちは保護者の方も招待した。そして私はここで、「ワセド」の思いがけない教育的意義を実感したのだった。

初めてのクリスマスパーティー。そこは、子ども、大学生留学生、親、という、三世代交流の場でもあったのだった。私たちは自ずと、その場の中で、自分たちの役割を認識した。大学生は子どもたちと楽しみながらも彼らのいいお兄さんお姉さんであり、留学生は自分たちの文化を子どもに伝えようとし、親御さんたちは子どもたちや私たちを温かく見守り、そして子どもたちの間でもまた、学校も学年も違う子どもたちが集まったことで、自然と、高学年の子が低学年の子の面倒を見るというような光景が見られた。

それぞれが「違う」からこそ、自分が何をすべきかが見えてくる、ということ、私はこの時発見した。その光景は、強豪サッカーチームのフォーメーションを見るように美しく

った。

それぞれがそれぞれに「異質」であること、しかし、だからこそ何かを共同する時に助け合えること、愛し合えること、私はそんなことに気がついた。同じ年代の、同じ考え方を持った、同じようなバックグラウンドの子どもたちばかりが集まっている学校に、私が違和感を覚えていた理由が、この時、分かったような気がした。私は、留学生たちといることが心地よかった。子どもたちといることが、心地よかった。「違う」ことを十分に知っている。前提にしている。しかし、それでもなお、いや、だからこそ、何かを共に感じられるのだという実感。

この実感が、その後私に、さらなるプランを思いつかせるきっかけとなった。それはまた、後の話である。

その後、会は少しずつ大きくなった。設立から私が大学を卒業するまでの三年の間に、大学生は五十人、留学生は十人以上から、のべ百人以上が集まった。子どもたちも、「世界と友だちになっちゃう会」と名づけた国際文化交流会には、毎回およそ四十人が参加してくれ、また、設立当初の夢だった小学校での授業も、行えるようになった。各学校で好評をいただき、東京都内の小学校十数校から、「国際理解の教室」の授業依頼をいただいた。各学校で継続的に授業をさせてもらうことで、「環境」としての「異文化」を志していた私の

夢が、少し叶えられたように思った。「違う」ことが当たり前前の「環境」。

モリツは「違う」ことがおかしくて、いじめられ続けた。だったら、「違う」ことが当たり前前の「環境」だったら、どうなのか。これは、私の長い間の問いだったのだ。その答えは、まだ分らない。しかし私は、そのような「環境」をこそ、子どもの頃から、夢見続けていたのだった。

実りある異文化交流の方法も、それまでに得たノウハウを活かして、いくつかのプログラムを作ることができた。当時、「国際理解の教室」における「交流」は、一人の外国人がいて、自国の文化について説明したり体験学習をしたりするというプログラムの学校が多かった。しかし、私たちのサークルには、子どもたちとほとんどマンツーマンで交流できるだけの外国人留学生がいる。そして彼らは、実に多様な国からやって来ている。子どもたちの気後れを緩和するために、留学生と大学生がペアになって子どもたちと交流することができる。

私たちにあるのは情熱だけで、様々な教育方法や理論を知っているわけではなかったから、私たちが考案した国際交流プログラムは、体のいいものとは言えなかったかも知れない。しかし、それでも多くの学校や子どもたちに求められたのはまさに、子どもたちが「はっ」とするような「環境」を作る

ことができたからではないかと思う。私たちにはきっかけを作ることしかできなかったが、しかし、「国際理解」に一番必要なのは、そのきっかけなのだ。

二、「共有する」ということ

—国際理解から人間理解へ—

ある時、国際交流財団から、日本語学校の留学生たちと交流する機会を作ってくれないかという依頼を受けて、私たちは、日本語学校との交流も頻繁に行うようになった。ワセドには、多くの留学生が参加してほしかったから、この申し出は私たちにとっても、ありがたかった。

日本語学校の生徒たちとの交流を通して、私は、さらに多くのことを学んだ。

新宿区内の日本語学校で学ぶ留学生（正しくは就学生）は、そのほとんどがアジア人である。中でも韓国人が多い。私は大学生活の半分を、多くの韓国人たちと共に過ごすことになった。

多くの日本語学校の学生たちと友達になってすぐ、私は彼らの日本生活における不満の数々を知った。まず、日本人と出会い、友人になる機会が、ほとんどないと言うのである。日本が好きで、その文化や人に触れたくて留学してきた学生、キャリアアップのためにやって来た社会人、純粋に日本語の

勉強がたくてやってきた高校生、留学の動機は様々だったが、日本には、何より実際に日本人と触れ合うことを目的にやって来たはずである。しかし、日本語学校では、周りには皆同じような留学生ばかりで、日本人と出会う機会は、先生以外にほとんどない。学校が終われば、生活費を稼ぐために、アルバイトに行く。焼肉屋、韓国料理屋、新聞配達、ファミリーレストラン、コンビニ……できるアルバイトは限られていて、そんな中では、なかなか日本人の友達もできない。大抵の留学生が、この同じような毎日の繰り返しに、フラストレーションを溜めていく。これでは自国で日本語を勉強しているのと変わらない、と、思うようになる。

日本はまだ、日本語学校の留学生にとって、生活しやすい国ではないらしい。住居も制限されていて、四畳の部屋に法外な家賃を払って生活している友人もいた。前述のように、アルバイトも限られている。確かに、就学ビザを入手して来日し、そのまま不法滞在する外国人もいるし、最近、そのような外国人の犯罪を頻繁にニュースなどで見るようにもなった。しかし、多くの熱心な留学生にとって、自分が日本に受け入れられないという経験は、想像以上の苦悩なのだ。せっかく日本が好きでやって来た彼らが、最後には日本を嫌になつて帰っていくという話を、私は何度も聞いた。

彼らの悩みの最大の理由を、私はやがて知ることになった。

意識的にも無意識的にも、それは、彼らが日本ではいつも「受身」でいる、ということなのだ。一日中、日本語を教えられ、仕事を与えられ、帰れば眠るだけ。自分らしさを自覚し、自分の力を発揮できる時間が、まったくないのである。自分が必要とされている、という実感が、ほとんどない。だからこそ、自分がこの環境を必要としている、という実感もない。やがて、日本に留学していても意味がない、と、思うようになる。

ワセドは、そんな彼らにとって、ゆくりなくも想像以上に有意義なサークルであつた。彼らはここで、小学生たちに自分の国の文化を伝えることができる。たとえ自分の国の文化について詳しくなくても、(大半の留学生はそうだが、)子どもたちと接するだけで、「異文化」に触れた子どもたちは多くを感じる。ワセドにとって、彼らはその存在自体が、なくてはならないものだつた。それは確かに、彼らが韓国人だから、中国人だから、フランス人だから、アメリカ人だから、という理由でもある。しかしそれ以上に、彼らが私たちとは「違う」から、つまり彼ら個人が彼ら自身であるからこそ、私たちは彼らが必要としていたのだ。

そうしてワセドに集つた仲間たちの多くが、家族のように強い連帯感と愛情を感じるようになったのは、不思議だったが、当然のことだつたようにも思う。

上述のように、留学生はワセドに参加することで、自分の力を発揮し、その存在意義を実感する機会を得た。そして、それは私たち大学生も同じだった。それぞれが「違う」からこそ、自分が何をすべきなのかが、いつしか見えてくるようになった。行動力に優れた者もいれば、場を盛り上げることに長けた者もいる。日本語のできない留学生との間にたつて、通訳をすることができる者もいる。私はリーダーとして二年間ワセドの代表を務めてきたが、私のしたことと言えば、ただ、そんな大学生留学生たちが、最も自分らしくあることができて、最も自分の力を発揮できるような環境を作ることだけだった。あとは彼らが、十分にその環境を活かしてくれた。そうすることで、皆、ワセドの中の存在意義を実感することができた。自分は少なくともワセドの中では必要とされていて、そして皆を必要としている、という感覚を得ることができた。こうなったら、もう日本人も外国人も関係なかった。それぞれが、ただ純粹に、自分自身であることができた。国際理解から人間理解へ……私たちは少しずつ、考え方を発展させていた。家族のように仲良くなれたのは、そんな環境のおかげだったと思う。

そして、そんな環境には、「人間理解」を可能にする最大の要因があった。

私たちは、日本人と外国人という国境を越えて、共に、小

学生のための国際文化交流会を企画するという、同じ目的を共有していたのだった。それはつまり、企画に伴う喜び、辛さ、成功の喜び、失敗の苦しみを、共にするということだった。企画の段階で、文化や言葉の違いから、何度も齟齬や喧嘩を経験した。しかし、喜びや悲しみといった感情を共有した時、私たちは、「違い」を乗り越えることができた。「違う」からこそ助け合える、という考えが、もう一歩前進した。「違う」ということを、もはや考えさせないくらい一つになることが、私たちにはできるのだと思った。国も言葉も世代も文化の違いも、すべてを超越して、一つになったと感じられる瞬間が、私たちにはあるのだと知った。それは、私がワセドを始めて二年が過ぎて、ようやく知った感覚だった。そうして初めて知る、最高の感覚だった。ただ、会って話をするだけでもいいだろう。酒を酌み交わすのもいいだろう。しかし同じ目的を「共有」し、同じ喜びや悲しみを、同じ笑顔や涙を「共有」することで、私たちはもっと、ぐっと近づき合えるのだ。

成田空港で、数え切れないくらいの留学生の帰国を見送った。私たちはいつも、抱き合って泣いた。アンナという韓国人留学生は、「日本人とこんなにも、家族みたいになれるとは思わなかった」と言って、また泣いた。

韓国人の男は、人前で涙を見せてはいけならしい。李と

いう、その大きな図体からパパと呼ばれていた留学生は、淋しさを隠すように、ほとんど大爆笑をしながら、ゲートを通っていった。その笑みの奥に、何もかも通じ合った、私たちの何かを見たように思った。

日本に留学するくらいだから、極端な反日感情をもった韓国人留学生には私はあまり出会わなかったが、それでも酒が入り、少し歴史や政治の話になると、日本の学生よりはるかに関心の高い彼らは、次第に激昂し始めることがあった。そんな中で、朝まで議論をしたことも少なくない。アンナとパパも、そんな仲間だった。しかし議論の後、不思議と少しも怒りや不満が残らなかつたのは、やはり、それまでに多くのものを「共有」してきた、私たちの絆があつたからだろうと思う。

アンナとパパとは、ちょっとしたエピソードがある。

ある韓国人女性に、ワセドの大学生が恋をした。彼女は帰国間近で、彼には時間がなかつた。それまでにどうしても告白したいと、彼は、私とアンナとパパに相談した。

当時、私の部屋はワセドのために、いつでも開放していた。交流を求める留学生たちが、多く集まつた。八畳の部屋に二十人が酒をあおり、雑魚寝したこともあり、隣近所には、ずいぶん迷惑をかけてしまった。

その部屋に、彼と私と、アンナとパパがいた。

韓国人は親しくなると、勝手に冷蔵庫を開けて食べたり、

飲んだりする。それが韓国流の友情らしい。始めのうちは閉口したが、段々と、その遠慮のない関係が好きになった。いつしか私の部屋は、韓国式の、実にあけつっぱりな雰囲気になった。

アンナとパパは、その日本人の友人にも、遠慮がなかつた。彼の恋している韓国人女性に、彼に気のないことは、誰の目にも明らかだった。二人は、絶対無理だ、やめておけ、そんなことをして、帰国した彼女がワセドに戻って来づらくなつたらどうするんだ、と、まくしたてた。日本人なら、そんなことはまず言わない。方便でも、がんばってみるよ、と言うだろう。彼は、ほとんど泣き出さんばかりにシヨックを受けていた。

と、その時、黙つて聞いていた私を見て、アンナとパパは、突然謝り始めたのである。お前を怒らせてしまった、と。私の沈黙が、怒りのあらわれだと思つたらしい。

韓国では、本当に仲のいい友達には、どんなことも遠慮なく、決して建前なく言う。それで喧嘩になつて怒鳴り合つても、次の日には、けろつとまた元に戻っている。しかし、こゝは日本だった。建前を自分たちは忘れていた、と言うのである。これには私が驚いて、そんなことを言われて、逆にシヨックだと二人に言つた。何でも遠慮なく言えるほどに深い関係になれた自分たちを思つて、とても嬉しかったのに、と。

二人は、何だ、そうだったのかと言って笑った。家族のよう
に仲良くなったと思っても、実際、こういう愛らしい
文化の食い違いは、何度か経験した。

結局、その日本人は、彼女に告白をした。恋は成就せず、
彼女は韓国に帰っていった。今でも、私たちは韓国に行くた
びに彼女に会う。

三、異文化異世代コミュニティスクールのアイデア

子どもの頃感じた現代の学校への違和感、そして、それ
ゆえに夢見た、多様な人たちが多様に、それぞれ違いなが
らも、だからこそ互いを必要とし愛し合えるような教育環境。
ワセドの設立と経験で、私は、そんな教育環境の可能性を、
信じるようになっていた。

私は大学院に進学した。教育学研究科で、教育思想を専攻
した。新しい教育環境、さらに言えば、新しい学校のような
ものを作りたいと願っていた私が、教育行政や教育方法、あ
るいは国際理解教育といった、より直接的なテーマを選ばな
かったのは、ワセドで感じたあの一体感、国も言葉も文化も
すべてを越えて味わったあの昂揚感を、一度ゆつくりと考え
てみたかったからだ。思想的な研究でしっかりとした基盤を
作ることも、夢の実現のためには必要だと考えたのだ。

そうして今、修士課程を終えようとしている。博士課程へ

の進学が決まったが、まだまだ夢の実現のためには修行しな
ければならぬだろうと思っている。

そんな中で、ひとつ温めているアイデアがある。それが、
異文化異世代コミュニティスクールというアイデアだ。

「違う」ことが当然の学校があればどうか。モリツはいじ
められずにすんだらどうか。というのが、私の模索の始まり
の一つでもあった。あまりにも同じような人間が、学校には
集まりすぎている。もつとも、「違う」というのは程度の差
で視点の違いでもあるから、現代の学校も異文化の集まった
コミュニティだということはできる。しかしやはり、今のよ
うな環境では、私たちがワセドで感じたあの存在意義の実感、
人間理解、人間愛は、中々容易に達成できないのではないか。
近年、幼稚園に老人ホームを隣接するといったスタイルの
教育機関が、問題もあるにせよ、効果を上げているという。
私はこれを、もつとダイナミックにやってもいいのではない
かと思う。

具体的にはまだ思案中である。しかし、イメージとしては
ある。子どもたちがいて、お年寄りがいて、学生がいて、外
国人がいる。学校と老人ホームと学生団体と日本語学校が混
在し、それぞれが自然に触れ合えるような場があっても、い
いのではないかと思う。

今日の教育は、子どもたちを、与えられるのみの存在とし

て考えていないだろうか。徹底的に「受身」の存在として、考えていないだろうか。知識を授け、社会に適応できる感覚を身につけさせ、庇護し、育てる。しかし、もしかしたら、それが、あの日本語学校の留学生たちと同じようなフラストレーションを溜めさせる理由になっているとは、言えないだろうか。

私たちはワセドで、子どもたちを、何かを与える対象としては見てこなかった。私たちの方こそ、彼らから学んだことは多いかも知れない。

「違う」人たちが集まった異文化異世代コミュニティスクールは、子どもたちが、子どもたちだからこそ、他の文化、他の世代の人たちに、貢献できることがあるに違いない。子どもたちから、元気を貰いたいというお年寄りが多い。それは逆にお年寄りが子どもたちに、たとえば、昔の遊びなどを教えることでも可能なことだ。子どもたちは、留学生に異文化を教えてもらいながらも、その留学生は、子どもたちに教えることで存在意義を実感することもできる。「違う」からこそ、それぞれがそれぞれに必要なコミュニケーション。私は教育こそ、そのような場であってほしい、と願うのである。ワセドに集った子どもたちや留学生や大学生たちから学んだことを胸に温め、私は、そのような教育環境を、いつしか実現させたいと願っている。

おわりに

国境を越えて、私は、「人間愛」という、どこか明記するのが恥ずかしくなってしまうようなものを、その言葉の本来の意味において学んだ気がする。そして、それは私の人生を大きく変えた。なにしろ、その「人間愛」を最大の目的にした新しい教育環境づくりなどという、ほとんど夢物語のようなことを、人生の目的にしようと決めたのだから。